

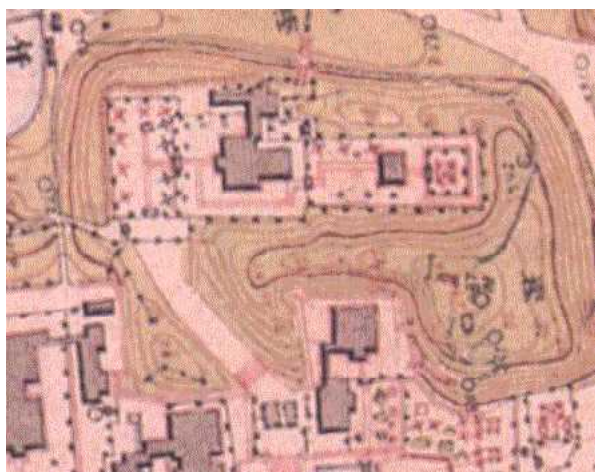
増上寺徳川家霊廟の風景(11)

―海を渡った灯籠たち(中)―

今回は清揚院の霊廟について書いてみます。

増上寺に最初に霊廟が営まれたのは、寛永三年に亡くなった二代將軍徳川秀忠の正室お江の方、崇源院の廟所です。本堂の北、今の東京プリンスホテルの場所に霊牌所、奥の院が造営されます。その後寛永九年に秀忠が薨じた後に本堂の南側に台徳院霊廟が造営されます。奥の院は南側の高台に作られました。台徳院霊廟が作られた後に、家光の命で台徳院霊廟と並ぶ位置に崇源院霊牌所が造替され、旧霊牌所は鎌倉の建長寺の法堂(後仏殿)として払い下げられます。この辺りの事情は田邊泰が『崇源院霊牌所造営私考』に詳しく書いています。三代將軍家光の霊廟は日光輪王寺と上野の寛永寺に、四代家綱は寛永寺に造営されますので、台徳院以後増上寺に本格的な霊廟が造営されるのは、六代將軍の生父となる徳川綱重(一六六四―一六七八年)の清揚院霊廟が初めてとなります。

ここでは明治十七年陸軍参謀本部が作成した五千分の一測量原図から明治初期の清揚院廟の建物配置を見てみましょう。



本堂裏手、黒本尊の左脇に門があり(写真1)その門から背後の丘陵部まで坂が続いています。登り切った所に勅額門(写真2)があります。此の地図には描かれていません。木子文庫の明治初期の絵図には描かれていましたから、明治十七年には取り払われていたものと思われる。

勅額門内部に石灯籠が数基並んでいるのが見えます。地図の×印は灯籠を表しています。数は正確ではありません。写真1、2は『東京国立博物館蔵 幕末明治期写真』

資料目録1』に掲げられている物ですが、他にも二葉納められています。奥院の拝殿(写真3)と墳墓門・宝塔(写真4)を写した物です。写真4の左端には写真3の拝殿の右後ろ部分が写り込んでいます。地図で見ると清揚院廟の右手部分になります。



写真1 本堂裏手の黒本尊脇の門



写真2 清揚院勅額門



写真3 清揚院奥院拝殿



写真4 清揚院奥院墓所



写真5 清揚院水盤舎と推定される写真



写真6 現在の増上寺内水盤舎

実は『東京国立博物館蔵 幕末明治期写真資料目録Ⅰ』にはもう一葉清揚院の物と思われる写真があります。キャプションには「増上寺」とのみありますが、背後に配置されている石灯籠と水盤舎の形から、清揚院の水盤舎を写した物と思われます。位置は勅額門から入った正面になります。

清揚院の水盤舎は現在では三解脱門の内側本堂左手に移されています。『増上寺徳川霊廟墓とその遺品・遺体』（東京大学出版会）に、調査時点の清揚院廟の位置関係を記載した部分が有りますので引いておきます。

綱重の廟と墓は増上寺の本堂の背後にあたる位置に造られた。その入口は境内の後方にあつて、ちょうど、北墓地と南墓地の間をぬけて一番奥を南に入つた所である。いま、テレビ塔の下に近い位置である。台徳院秀忠の廟とつづく台地で、ここに屏をめぐらした区画があつて、清揚院綱重の廟墓はこの中に囲まれている。廟は入口から坂道を南に進んで、一旦左に曲がつた所に勅使門、唐門があり、それを入ると南面して建ててあつた。本殿の後方に少し離れて墓が造られていた。低い屏に囲まれて墓は、また、別の区画をなしていた。記録によれば、綱重の墓は、もと伝通院（文京区小石川）に造られたのであつたが宝永元年（1704）増上寺に改葬されたのであるという。伝通院の墓の模様は明らかでないが、この増上寺の墓は盛土で蔽つた円墳で、高さおよそ3 m、径、10 mほどの大きさである。



写真7 清揚院墓所調査時の写真

円墳につくられたことはこの時期の墓としては稀である。墓は、いま荒れて盛土も崩れて原形がいくらか変つていゝるであらう。墳丘には雑草も生えていゝるし裾の部分が乱されていゝるところもある。写真に見るのは、改修工事が始まつて封土を除きはじめ内部の石組の一部が見えたところである。封土が除かれてはいゝるけれども、まだ墳形を知ることかできる。

墓所が解体されたときにすでに墳丘の様になつていたので、清揚院の墓所は円墳で有つたかの印象を与えかねませんが、写真3に見られる様に他の墓所と同じように石造の宝塔を持つ墓所構造となつていました。おそらく明治の中期頃に霊廟の建物が解体され、シーボルトらに払い下げられた後に盗掘などを恐れて墓所を土で覆つたものと思われる。

綱重の改葬の次第を知るためにまず、『徳川諸家系譜』に収載されている『幕府祚胤伝』から没後の記事を書き抜いてみます。

延宝六年庚午九月十四日、御逝去、御年三五、

○十七日、出棺、伝通院江御入棺、○廿七日、御葬式、○從廿八日、御法事、○十月朔日、御結願、御名代大久保加賀守、○十一月朔日遺物献上、御刀備前守家代金五十枚・京極茄子御茶入・内赤 盆・鶉之羽茶壺、此外略レ此、

清揚院殿円誉天安永和大居士

宝永二年乙酉四月十四日、墓廟共増上寺江可レ被レ移之旨有レ命、西丸御側戸田大炊頭忠利奉ニ造営奉行一〇廿九日、新初、鉄初、○五月十六日、助造命三阿部飛騨守正喬一、小笠原佐渡守伝レ命 〇十八日、御作事奉行小幡上総介、御書院番酒井下総守組須田助十郎、建営司有レ命、○七月廿九日、御供料被レ附、七百石別当所化普碩、御加三三百石一、○九月十

一日、上棟、○廿九日、御改葬之御法事掛、寺社奉行三宅備前守、御勘定奉行中山出雲守、御賄御代官平岡三郎衛門、

同三年丙戌九月十四日、重相君（綱重）御参拝

同六年九月七日、勅会万部、知恩院宮御参向、御焼香被_二出座_二了院僧正、六役法恩寺・天性寺・長香寺、山役光照院・先求院・此外徳林院・信重院・九品院・浩徳院・源光院・大長寺等出勤、同日、御贈官位、贈正一位大相国宣旨久我前内大臣持参、大久保加賀守、伝奏屋敷_江相越、織田能登守差添、同日、根来平左衛門増上寺_江持_二参之_一、参向面々十月十八日、御暇、清閑寺大納言、勧修寺大納言・園中納言、高倉中納言・平松三位・高倉中將・勧修寺右大弁・野々宮少将、女御使西村安藝守等

此時、開三通元院_一為_二御別当_一、廿四日、勅額到着、御目付河野勘右衛門附来、上覧以後増上寺_江被_二差越_一、柳沢出羽守、御目付鈴木飛驒守相添え、○廿五日、御仏殿上棟、○廿九日、御遷座、御名代大久保加賀守

家宣が將軍継嗣となったことで、綱重は將軍生父として小石川の伝通院から増上寺へ墓所を移されることになりましたが、同時に生母のお保良の方も長昌院と諡され、谷中の善性寺から移されて寛永寺に霊牌所を営むことになります。

宝永二年十月五日に清揚院の遺骸、十二日には長昌院の遺骨が移されます。記事の中で宝永六年とするのは誤りで、『文昭院殿御実紀』では全て宝永七年の事としています。『常憲院殿御実紀』には改葬に関して十月二日の記事として次の様な記載があります。

この日令せらるゝは。清揚院殿改葬の道筋。邸宅窓蓋すべし。手桶は出すべからず。改葬のときの衣服。増上寺にては長袴、傳通院并に道筋は半袴。長昌院殿改葬道筋。善性寺より感應寺の裏通り。上野谷中門たるべしとなり。

『江戸町触集成』（第二巻 塙書房）にはこの時に出された町触が納められています。

覚

一今六時清揚院様就御改葬、伝通院より増上寺_江被_二為入候間_一、町中之者共何方_江も不罷出、火之用心之儀随分入念、月行事自身裏々迄度々廻り、無油断可申付候、御尊骸御通之御道筋_江一切罷出申間敷候、町々名主月行事前後之木戸_二付居_一、喧嘩口論万事物噪敷儀無之様、急度可申付候、少も油断有間敷、以上

十月五日

町年寄三人

覚

一今晚長昌院様御改葬候之間、町中之者共何方へも不罷出、火之用心之儀随分入念、裏々迄月行事自身度々廻り無油断可申付候、尤町々名主月行事前後之木戸_二付居_一、喧嘩口論万事物噪敷事無之様急度可申付候、殊ニ風立候間、火之元別_而大切_ニ仕候様急度可申付候、少も油断有間敷候、以上

十月十二日

町年寄三人

暮六ツ、日没から間もない時刻に、静まり返った江戸の町筋を改葬の行列が通りすぎていく情景が目映る様です。

清揚院の改葬に関する『常憲院殿御実紀』の記事は

○四日 清揚院殿を傳通院より三縁山にうつしおさめ奉る。小笠原佐渡守長重。目付榊原八兵衛忠知。柳澤八郎右衛門信尹御先にまかり。戸田大炊頭忠則。目付久留手左衛門正清。鈴木伊兵衛直武供奉し。先手前島太郎右衛門重命。杉浦武兵衛政令。雨宮近江守正長。徒頭中山權左衛門勝尋山を警衛し。先手頭浅野伊左衛門正氏傳通院を警衛し。目付駒木根長三郎政男御跡の事つかふまつる。

とさりげないのですが、長昌院の記事は

○十一日この日 長昌院殿御改葬により。すべての供奉は谷中門外にとゞめ。御法會はてゝ 御墓へ納らるゝときの御供し。越智下総守清武并に用人は 靈廟門内までまかり。桐間番頭。焼火間番頭。目付。并に瓦林源右衛門嘉久。同清右衛門良中は御墓門外までまかるべし。御蓋畢らば。供奉の輩しりぞくべし。御墓へ入らせらるれば。惣供奉はかへらしめ。目付は上野へ二員。善性寺へ一員まかり。御跡までありて。諸事命すべ

しとなり。

とかなり具体的な記述となっていて興味深いものがあります。越智下総守清武は家宣の同腹の弟で、懷妊中のお保良の方が越智与右衛門善清に下されたので、初め越智を姓としますが、宝永四年松平の姓を許され、館林城主となります。徳川の姓を離れた清武であればこそ墓所で改葬の立ち会いをする事が出来たものと思われまます。

清揚院と長昌院の墓所の状態を今野春樹は『徳川家の墓制』（坂詰秀一監修 北隆館）の中に次の様に記録しています。

清揚院（六代家宣父）は実子家宣の將軍継嗣決定にともない、宝永2（1705）年に伝通院から増上寺へ改葬された。埋葬施設は地上に構築された円形盛土内に石槨が築かれている。石槨蓋石は同形の板石2点が使用され、長さ200cm×幅104cm×厚25cmを測る。下面は丁寧に磨かれ、墓誌文が刻まれるが、撰者は不明である。石槨身は不揃いで荒い調整の石材2段積みであり、内側面は磨かれている。内法は150cm 四方×高さ150cmを測る。内部に紙袋詰め石灰が入れている。

棺槨は腐食が甚大であり、重数と寸法は報告されていない。棺槨は槨台に載せられ、槨台には隅金具や各面2点の吊手、そして環の付いた槨台金具が確認されている。朱は使用されず、埋葬体位は胡座である。（中略）

長昌院遺体は火葬されている。火葬骨を納めた骨蔵器及びその外容器を納めた石櫃は、宝塔直下で基壇一、二段目中心部の地表上に設置されている。（中略）蓋石は一石からなり、下面には墓誌が刻まれているが撰者は

不明である。墓誌中に「贈従三位」と見られるが、長昌院が従三位を追贈されるのが、改葬直前の宝永2（1705）年10月9日であることから、墓誌が改葬時に刻まれたことが判る。（中略）

石櫃内には骨蔵器とその外容器が納められている。外容器は三重であり、外側から外木箱、内木箱、外甕そして骨蔵器の順で納められる。（中略）

骨蔵器は瀬戸美濃系の鉄釉の施された三耳壺である。内部には火葬骨が高密度で詰め込まれており、水分を吸った火葬骨が膨張したため、骨蔵器は割れていた。蓋には瀬戸美濃系の灰釉を施した皿が使用されていたが、割れて骨蔵器内に落ち込んでいた。

この瀬戸美濃系の骨蔵器に納められた長昌院の遺骨が松平（越智）清武の見守る中で墓所に納められたこととなります。

清揚院は十月五日増上寺に改葬された後、十日には宝塔供養があり、十三日には法要が営まれています。

五年後の宝永七年九月の三十三回忌を前に正一位大相国が贈られ二十四日には勅額が下されます。

清揚院廟は、三十三回忌の法要を前に遷座が行われ、仏殿の造替が行われます。勅額が下される事も沙汰されていますので、勅額門もこの時に造営された物と思われます。従って写真や古図に見られる清揚院廟の姿は、この時以降の物と考えて良いでしょう。

ところで埼玉県飯能市にある武陽山能仁寺の門前には、清揚院が伝通院に葬られた時の宝篋印塔と思われる石塔が建っています。（写真8）



写真8 能仁寺門前宝篋印塔

宝篋印塔には四面に

甲府宰相源

朝臣綱重卿

延寶六

戊天

清揚院

正三位前参議

圓譽天安永和

大居士神儀

九月十四日

と記されています。

能仁寺は文亀年間に中山家勝が創建した寺で、宝永三年一族の大名黒田直邦の助力もあり、五十石の朱印を受ける大寺となります。また寺宝とされる「宝冠釈迦如来（伽羅觀音）」は桂昌院により寄進された物と伝えられています。残念ながら能仁寺と清揚院との繋がりを示す物はありません。

能仁寺の参道には西武球場建設時に運び出された増上寺の石灯籠が多数置かれています。或いはこの宝篋印塔も増上寺にあった物が石灯籠と一緒に能仁寺に移された物かもしれません。

秋元茂陽は『徳川將軍家墓碑総覧』の中で

「徳川諸家系譜」を見ると、「墓廟共増上寺」と記載されていることから、綱重の墓碑と壺廟は伝通院から増上寺に移転されており、そのことから綱重の墓碑は、改葬時に改建されたものではなく、初葬地である伝



写真9 能仁寺参道の石灯籠群

通院に建立されていた墓碑であることもわかる。伝通院と増上寺の宗旨を見ると、ともに浄土宗であることから、墓碑を改建する必要がなかったものと考えられる。(中略)

この当時、將軍の墓碑は、唐銅宝塔墓を建立することが確立されていたことから、四代家綱の墓碑は石造宝塔墓から唐銅宝塔墓に再建されているが、綱重の墓碑は將軍の実父として、五輪塔墓から唐銅宝塔墓には再建されていない。

と書いていますが、伝通院から「墓廟共」に移されたという記述から、綱重墓に宝塔が営まれず、宝篋印塔がそのまま墓碑とされたとする見解は頷けません。生母のお保良の方でさえ、改

葬先の寛永寺には立派な墓所と宝塔が築かれています。また此の当時將軍の宝塔が石造宝塔から唐銅宝塔に建て替えられています。これも將軍に限った話で、しかも文昭院の宝塔を最後に以後唐銅宝塔が造られることは有りませんでした。桂昌院の宝塔は綱吉の意向もあつてか唐銅製ですが、葵の紋が付けられることは有りませんでした。

宝塔造営について『鈴木修理日記』には

御切紙拝受仕候、然ば上野八日御仏殿唐金御宝塔絵図之仕形、此度増上寺清揚院様御宝塔石之間数、張紙之仕形被遣候間、絵図は五分一之割致、付紙は此格之仕形ニ、指渡・高サ共、所々ニ而致付紙、明日可指上之旨、奉得其意候、併只今方被仰下候通ニは地割出来兼申候、兎角明朝五ツ前後伺公仕、委細可申上候、先年、八日御仏殿からかね之地割、漸只今仕懸り候故、出来次第、明朝伺公、御窺可申上候、久三郎方指上候御宝塔之図、先請取置申候、是も此方方指出候絵図ニ御座候、以上。

六月廿六日

曲越前守様

鈴木 修理

この時期桂昌院の逝去もあり、鈴木修理長常の宝塔に関する記述も入り乱

れています。將軍生父の宝塔の制作には、前將軍敵有院宝塔の(上野八日御仏殿唐金宝塔)が参考にされています。結局「上野八日御仏殿宝塔寸法壺丈三尺七寸程、九尺五寸之寸法ニ致候へば四尺三寸引申候」と有りますから、敵有院の宝塔から惣高で四尺二寸差し引いた九尺五寸の宝塔が造られることになりました。「鈴木修理日記」はこの六月の記述から三ヶ月分が欠けていますので、どのような手順で宝塔造営が進んだのか明らかではありません。しかし延宝九年に敵有院の石造宝塔が造営された時の記録は残っていますので、これは「燈籠石は船に揺られて」に書いていますので参考にしてください。この後「常憲院殿御実紀」には

○十月十日三縁山にて 清揚院殿宝塔供養あり
○十二月廿六日 けふ清揚院殿宝塔造作せし石工に銀三十枚給ふ。(日記)

と有りますので十月十三日の法要前の十日には宝塔の供養が行われ、十二月には石工に報奨金が下されています。

ところで今増上寺の徳川家將軍墓所の左手奥に宝塔の残骸が残されています。今野春樹は「徳川家の墓制」の中で



写真10 増上寺内清揚院宝塔(?)

また増上寺徳川家靈廟内の片隅には廃棄されている石製円形宝塔がある。塔身のみが残り、他の部材は消失している。この宝塔の塔身直径は「1.09」を測り、各階層の宝塔直径と比較すると將軍の七代家継以降の石製宝塔の直径「1.09」に近似値であることがわかる。増上寺埋葬で墓標不明被葬者のうち、將軍と匹敵する宝塔を建てるに値する人物は清揚院(六代家宣父)しか該当しない。清揚院は三代家光の二男であり、実子の家宣が五代綱吉の継嗣に決定の後、宝永二(1705)年閏四月十四日にそれまで埋葬されていた伝通院から増上寺に改葬する命令が出されている。塔身直径から廃棄宝塔が清揚院のものであることは明らかである。

と書いています。筆者も前々からこの宝塔の素性を気にしていましたが、解

明の手立てが無いままに過ぎてきました。宝塔の口径から被葬者を推論していく手法は、多くの徳川家墓所の調査を手掛けてこられた今野氏ならではの、傾聴に値します。

本来であれば、ハインリッヒ・フォン・シーボルトとそのコレクションについて書くことが予定でしたが、紙数が尽きました。次回はこのテーマについて書き、最後に清揚院、桂昌院の銅灯籠について書くことにします。

(四月二十九日)